

第86回全日本大学総合選手権大会
(個人の部 以下、全日学)
女子シングルスで、
涙の全国大会初優勝。
父・利壮との
約束を果たす。

MORIYA AYANE 森田彩音

1997年
8月22日生
静岡県菊川市出身
中央大学4年生



で卓球を始めることにしました。実は両親も、高校時代の3年間、卓球経験があったのです」

中学校からエリアカに進学。苦しい経験もしたという。

「環境が凄く整っていて、周りの格上の選手が大勢いました。思うような結果を出すことができなかった。ここにいるべきではないのではと申し訳ない気持ちがありました。国際試合では結果を出すことができて、国内試合では結果を出せない。そのために、実力がついているか実感がありませんでした」

以前から憧れていた中央大学に進学する。

「中央は、なぜかわかりませんが、小さい時から行きたい大学でした。エリア力の施設と比べたら差がありますが、初めて見学に

行ったとき「私にはこういう環境が合っていると居心地が良かったのを今でも覚えています」

当たり前ですが、エリアカ時代は消灯時間のルールなど、時間に追われているイメージがありました。学生も時間制限はありますが、自分がしっかり管理できれば、好きなだけ練習ができる。やろうと思えばなんだったのでは、という環境があり、気持ちがいやになりました。

来年から、実業団チームでプレーしますね。

「去年の全日学の時まではやらないと決めていて、親も自由に決めていいと言っていました。8歳上の兄に相談したところ、卓球から一回離れてまた卓球をやるというのは絶対に無理。卓球を満足するまでやりきって、その後違う道に進むという流れがよい、とアドバイスされました。それで卓球を続けることにしました」

森田の試合がある時、全国どこであろうと試合会場には必ず両親が足を運ぶ。

「ずっと父が指導をしてくれて、細かい部分を指導してくれるのも父でした。反抗期には鬱陶しくなり、試合会場でも本気で怒られて嫌になった時もありました。父から「本当に口うるさくいうのは大卒4年間だけだから」とメッセージをもらいました。あとちょっとだから我慢しよう、と今では思っています。そのままでしてくれなかったら、今回の優勝もですが、今の卓球人生はないと思うので感謝しています。もちろん、どんな時でも応援に来て支えてくれる母にも感謝しています。家族は本当にありがたい存在です」

次の目標を聞いた。「全日本選手権でランク入りし

今回の主役、森田彩音のプレーを初めて見たのは、平成21年度の全日本選手権大会。ミスが少ない安定した両ハンドドライブで、小学6年生ながら女子シングルスで3勝、ベスト64入りを果たして話題を集めた。JOCエリートアカデミー(以下、エリアカ)で中高時代を過ごし、中央大学に進学、4年生になって悲願の全国タイトルを獲得した。

(文中敬称略)

「全日学では、シングルス、ダブルスの2冠を狙っていました。ただ、私の調子が悪く、ダブルスは初戦敗退。バートナーの梅村も落ち込ませてしまい申し訳ないことをしました。ただ、これでシングルスは頑張るしかない、と切り替えることができました」

森田のプレーの特徴はラリー、ラリーにミスが少なく、コース取りも的確。相手の強打に対しても粘り強く返す。

準決勝で、関東学生選手権で負けている松岡優香(東京富士大)と対戦。少しやりにくさはあったのですが、ビデオを見て対策練習をしていたのでイメージを持ってプレーすることができたのが良かったと思います。決勝は、後輩の山本笙子(普段のゲーム練習でも部が悪い相手でした)

決勝前はどんな心境でしたか。

「昨年は、思いもよらない決勝進出で、フワフワした気持ちでした」

「今年はずっとこういう心境になるのだけはやめよう、と思っていました」

ゲームカウント1対2でリードされていますね。

「いつも通りの展開で、特に慌てませんでした。頭を使わないとこのまま負けてしまうな、と思ったので、サーブ、ラリーのコース取りなどを考えました」

優勝した気持ちは。

「優勝できた！という達成感でした。こんな自分でも優勝できるんだ、という気持ちですね。これまでずっと2位が多く、在学中にタイトルを獲得し、家族と約束していたので嬉しかったです」

森田は5歳の時に、卓球に運命的に出会った。

「家族でボーリングをしに行っていたのですが、上手くてさなくてクズってしまいました。同じ施設に卓球ができる場所があり、軽い気持ちでしてみました。父に「反応がいい」と言われ、私も楽しかったの、笑顔で語った。

目標です。来年から実業団でプレーします。チーム戦では優勝に貢献を、個人戦では出場する大会で優勝できるように頑張ります」

謙虚さがインタビューを通じて伝わってくる。

「性格がおっとりしていて、それが勝負には良くないので、出さないうようにしないとけませんね。自分で限界を決めて練習させず、いけるところまでいきたいな、と思っています」

卓球のおかげで、東京に出てくることもできたし、色々な人との

つながりもできました。自身の成長や、自身を見つめ直す機会にも恵まれたと思います。

卓球に感謝することはもちろん、みなさんに感謝したいです」と笑顔で語った。

勝負の世界で上に行くには「優しさ」が邪魔をする時がある。優しい気持ちに溢れる森田だが、今回の優勝で様々な経験ができたはず。いや、様々な経験を経て成長できたからこそ優勝できたのではないだろうか。これからどんな「続き」があるのか楽しみだ。



ベンチに入り、彩音選手を支えた父・利壮さん(昨年の全日学より)